祭りを支える人たちと、それぞれの想い

市民をはじめ県内外から多くの皆さまが来場し、開催時には、10万人以上の観客が参加する「宜野湾はごろも祭り」。本市最大イベントにまで成長した本祭りを運営側で支える方々にそれぞれの想いを聞いてみました。

宜野湾はごろも祭り実行委員会
事務局　高江洲　義之
（（一社）宜野湾市観光振興協会　事務局長）

―はごろも祭りでの宜野湾市観光振興協会の役割は

開催までは、主に祭り事務局として各関係機関と調整を行っています。また、「はごろも祭り」は役割の違う様々な委員会で構成され運営していますが、その各部署とやり取りをして、祭りが安全かつ安心に楽しく開催できるように準備をしています。

―はごろも祭りに関わっている人たちは

市商工会をはじめ自治会や老人会、婦人会など市内の各団体や臨時駐車場として場所を提供していただいている企業様、ご来場の皆さまや地域住民の方々に安心して祭りを楽しんでもらえるように宜野湾警察署、宜野湾消防署の皆さまにも協力をいただいています。そして、忘れてはならないのが、市民の皆さまや市役所職員の多くのボランティアの方々や、祭りを物心両面から支えていただいている市内外の企業の皆さまです。

―開催日を8月から9月に変更した理由は

第一に健康被害対策があります。沖縄の真夏の気温の高さもさることながら、湿度が異常に高く、お年寄りや小さなお子さま、また会場内で加熱食品を提供する業者さんにもかなりのダメージを与えてしまいます。それに関連して、食品の管理状況も高温多湿の環境の下ではすぐに傷んでしまい、食中毒被害者が出る恐れがあります。

そして、台風対策の観点からも7、8月に比べて9月の後半は台風の接近個数が少ない事です。「秋台風は大型」と言われていますが、野外イベントでは、その大小に関係なく中止や延期となりますので、発生リスクを考えて9月に開催しています。

―企画の段階で考えることは

もちろん祭りに訪れる皆さまが、今どういう企画、イベントに興味を持っているかを一番に考えています。また、宜野湾はごろも祭りは「見る祭りから参加する祭りへ」をコンセプトに置いていますので、老若男女問わずに一緒に作ることの出来るコンテンツも取り入れなければならないと思っています。

―祭り開催で大変なこと、また困ったことは

いくつかありますが、一番は「安全に終了させる」事です。二日間で15万人程の観客が訪れる宜野湾市最大のイベントなので、警察署、消防署の他、関係機関と計画、連携を密にして安全の確保に最大限の力を注いでします。

困ったことは、昨今の環境問題を廃棄物処理から考える方向になってきている中、まだ一部の方々がごみの分別に理解を示しておらず、火燃ごみのゴミ箱に不燃ごみがあったり、ごみの集積場に産業廃棄物が捨ててあったりと、祭り終了後の分別や廃棄に非常に困りました。

―運営に携わり、嬉しかったことは

祭りのフィナーレである花火が上がったとき、花火を観る観客の皆さんの明かりに照らされた満足そうな顔を見るときです。また、祭り終了後の巡回にまわる警察官からの、「お陰様で今年も何事もなく、終われそうです」の言葉を聞いた時ですね。

見る祭りから
参加する祭りへ

観客と作る側が
両方楽しめる

―今後のはごろも祭りについて

これまでの歴史を重んじつつ、新しい考え方を積極的に取り入れ、時代のニーズと合致した作りにしなければ「はごろも祭り」の成長は無いと考えています。また、昨今の沖縄県の観光形態に対応した、多言語に対応できる案内や、宗教、文化の違いによる「食」の提供のあり方など、来場されるさまざまな方の立場で考えることが大事だと思います。

宜野湾はごろも祭りは、これまで関わってきた全ての方々の宜野湾市を愛する心と、たゆまないご尽力によって県内でも有数の祭りへと発展を遂げてきました。私たちは、今一度「祭り」の原点に帰り、祭りを楽しみに来られる方、一緒に祭りを作ってくれる方の両方が楽しんでもらえる「宜野湾はごろも祭り」を目指していきます。

▲事務局の皆さん（一社）宜野湾市観光振興協会

第30回記念飛衣羽衣（とびんすはにんす）カチャーシー大会

飛衣羽衣カチャーシー大会実行委員会
実行委員長　新垣　義夫（普天満宮　宮司）

―カチャーシー大会を始めたきっかけは

今年で42回目となる「宜野湾はごろも祭り」は、昭和62年まで第10回と開催を重ねてきましたが、従来の祭りと同じで独自性がなく、誰もが参加できる催しにはなっていないことが課題でした。

そこで、当時、地域の方々や宜野湾青年会議所の皆さんとで構成されるボランティア団体「まちづくり★元気な市民会議」において、「宜野湾はごろも祭り」におけるメインイベントについて議論し、沖縄の民衆の喜びを表現する踊りである伝統文化の『カチャーシー』をメインイベントとして、平成元年に行われた「第12回宜野湾はごろも祭り」にて「第1回飛衣羽衣カチャーシー大会」が開催されました。

沖縄の文化である
カチャーシーを

宜野湾市から
発信していきたい

―飛衣羽衣（とびんすはにんす）の名称の由来は

当時、沖縄の民話を調べていた、沖縄国際大学教授の遠藤庄治氏が、はごろも祭りの名称の由来となった森の川の羽衣伝説から、天女と奥間大親の間に生まれた長女が、後の察度王となる弟をあやす子守歌からとりました。

♪泣くなヨーヨイ　母親飛衣羽衣（あんまあとうびんすはにんす）
六俣（むつまた）　八俣（やつまた）ぬ稲（いね）ぬ下（しちゃ）
粟（あわ）ぬ下（しちゃ）なかどあんどー

―今後の飛衣羽衣カチャーシー大会について

沖縄の文化であり、一般にめでたい席で踊るカチャーシーですが、地域によってさまざまな呼び名や踊り方があります。沖縄の人々が喜びを表現し、人を感動させるカチャーシーには踊りの一部に型があり、70以上の型があると言われています。飛衣の部では、この型を4つ以上は入れ込んでカチャーシーを披露しているので、こちらにも注目していただきたいと思います。

今回、30回の節目を記念して記念誌と式典の開催を予定していますが、今後は、これまでの反省も踏まえ改善し、沖縄の伝統文化として宜野湾から発信していきたいです。また、小学校や中学校の運動会などでは、エイサーの披露が盛んとなっていますが、学校側とも連携してカチャーシーも取り入れてもらえるように努力していきます。

宜野湾はごろも祭り実行委員会
総務部　仲村　厚子（観光農水課長）

―はごろも祭りでの市としての関りは

祭り自体の主催者となっていますが、実際には、実行委員会をはじめとする、祭り事務局や地域の方々など、多くのボランティアの皆さまが主体となっています。もちろん市役所としても、開催の両日には、400名以上の職員に協力してもらい、設営や清掃、会場周辺の交通整理などを事務局と一緒になって行っておりますが、地域の協力がなくては、成功できないものと思っています。

―この先、どういった祭りに成長してほしいですか

昭和53年に開催された「第1回宜野湾祭り」から、昭和58年に「宜野湾はごろも祭り」へと名称を変更し、見る祭りから参加する祭りへと飛衣羽衣カチャーシー大会をメインイベントに第42回宜野湾はごろも祭りの開催を無事に終えました。祭り全体としても、今後も市民が親しみ、誇れる、参加する全ての方が主役となれる祭りとして、発展していってほしいです。

親しみ、誇れる
参加する全ての方が

主役となれる
はごろも祭り

来年も、皆さまの
ご参加をお待ちしています